

## 扁鵲 其の一

### 家本誠一

中国古代の医師たちの姿は各種の文献に見ることができ  
る。第一に山海経。古代巫医の有様を知ることができる。

第二に史書。左伝には医緩、医和の事跡があり、史記には  
扁鵲倉公列伝がある。第三に諸子。莊子外雜篇、呂氏春  
秋、淮南子には医学に関する思想がのべられている。これ  
には当時の医師たちの意識も反映しているであろう。第四  
に医書。素問や靈枢にはこの医学を作った人々の意識と行  
動についての記載が随所に見られる。これらの資料を比較  
検討することにより、古代の医師像を画くことができるで  
あろう。

ここでは扁鵲伝と素問・靈枢を対比して、扁鵲伝の性格  
について考える。扁鵲の医学の内容についての検討は次回  
に譲る。

以下五つの項目について考察する。

撰抜。長桑君亦知扁鵲非常人也（史記）。非其人勿教（素  
問金匱真言4）。何れも弟子の撰抜には慎重である。

伝授。乃呼扁鵲私坐、問與語曰、我有禁方、年老欲伝與  
公、公勿泄、扁鵲曰、敬諾。乃悉取其禁方書盡與扁鵲（史  
記）。（黄帝）此先師之所禁坐私伝之也。（雷公）乃齐宿三日  
而請曰、細子願以受盟、黄帝乃與俱入齐室、割臂歃血、黄  
帝親祝曰、今日正陽、歃血伝方、有敢背此言者、反受其  
殃、雷公再拜曰、細子受之（靈枢禁服48）。伝授の儀式に  
ついての靈枢の記載は詳細をきわめているが、両者とも次  
の点は共通している。一。一対一の秘方の伝授である。  
二。秘方の漏泄と師説に対する違背の禁止である。三。師  
の言に忠実に従うという弟子の誓である。靈枢にはこの他  
に齐戒と血盟の次第が加えられている。秘伝という古代的  
授業の様式の合理性については別に考えたい。

修業。扁鵲以其言飲薬三十日、視見垣一方人、以此視  
病、盡見五藏癥結（史記）。雷公。細子得受業、且暮勤服  
之、近者編絶、久者簡垢、然尚諷誦不置（禁服48）。素問  
の著至教75にも一誦二解三别四明五彰の学習上の五つの  
道が示されており、雷公たちは素問の医学生たちはよく勉

学に励んだというべきである。この点、扁鵲は薬をのむという神秘的乃至隱喩的な方法で修業の問題をすりぬけてゐる。これは大きな違いである。

医業。扁鵲は業成つて諸国を遍歴する。齊、趙に在り。晉で趙簡子の病を見る。號で太子の尸厥を治す。齊の垣侯の予後を言う。そして邯鄲、洛陽に通り秦に至る(史記)。素問、靈樞には医師が遍歴する話はない。彼等の医業に於ける関心は次のようなものである。一。予後の判定には大変な努力をはらっている。これは扁鵲伝とよく一致する。二。医療過誤のいましめ。これが繰返し出てくる。三。医療技術の問題。故に上工(名医)と下工(敷医)の區別にやかましく、下工への警告が屢々ある。四。病人の社会的地位。これには二つの側面がある。一つは王侯貴族と布衣平民とでは生活が異なり、従つて病状も治療も違うということ、二つは技術が未熟では群僚はとも角、王侯の病は見られないということである。

以上四つの事柄は扁鵲伝の内容と大きな食い違いはないようである。問題は遍歴である。

これはどう考えたらよいのだろうか。扁鵲は一人ではな

いという説がある。それなら扁鵲伝は各地に定着していた名医たちの物語の集積したものだということになり矛盾はなくなる。又、素問靈樞が作られたと思われる秦漢の時代は世の中の交通往来も発達してきていたのであるから、医師たちの遍歴も充分あつたとも考えられる。

倫理その他。扁鵲伝には医の倫理についての記載はない。素問靈樞には儒教的仁慈の倫理觀がのべられている。この点、扁鵲伝の方が技術一遍倒のように見えるが、必ずしもそうではない。號の太子の尸厥を救つたとき、扁鵲は死人を生かしたと評判になつた。これに対して扁鵲は、死人は生かせない、当然生きるべき人を立たせたただけだ、と自然良能についての正しい洞察を示している。素問靈樞はこの種の言葉はない。むしろ自らの医術の積極的有効性についての自信の表白の方が多い。もっとも、医学の未熟によつて世に怨まれたり、難病に苦勞しても世間からののがられたりにすることに対する不満や不安の言葉も見られるが。

扁鵲の六不治、素問五藏別論の三不治は、共に山海經的巫医IIシャーマンの世界からの離陸を宣言する經驗的合理

主義の信条であろう。

以上の諸項の検討により次のように云うことができるであらう。

左伝は合理主義的な士君子の出現を告げると共に、尚巫的世界の怪奇を色濃く残している。この左伝を背景にしてみると、扁鵲伝は素問靈枢の世界に極めて近い。寧ろ相符合する所が多いと考えられる。

(横浜市・開業)

## Ruggero Oddi と同括約筋の今日的意義

小野 慶 一

Ruggero Oddi は申すまでもなく総胆管・十二指腸接合部における括約筋を発見したイタリアの生理学者で、一八六四年七月二十日 Umbria 地方の中心城市 Perugia に生れた。一九八四年七月二十日はその生誕百二十年に当る記念日である。

一八八七年、彼は医学部四年在学中の研究論文にて彼の名を冠する括約筋を発見した。その後 Firenze に転じた後も同括約筋の生理学的意義について研究を継続し、今日胆道外科にて繁用される術中胆道内圧測定法の基礎をつくりあげた。

著者は一九八三、一九八四年再度にわたって Perugia を訪れ、彼の事跡について調査を行い、若干の知見を得たのでそのあらましについて報告したい。Perugia 市当局は彼